

東日本大震災から学ぶ保育者に求められるもの

鯨坂 はるよ*

A Case Study of Great East Japan Earthquake — Required Ability as Childcare Worker —

Haruyo Ajisaka

【キーワード】 東日本大震災, 保育者, 防災

Great East Japan Earthquake, childcare worker, disaster prevention

1. 問題と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、死者数1万5899人、行方不明者2529人という甚大な犠牲者を出し、その死因の90.4%は津波による溺死¹⁾である。

東日本大震災は、保育所や幼稚園でも犠牲者を出した。東日本大震災の際、宮城県石巻市の日和幼稚園で子ども5人、職員1人、宮城県亶理郡山元町のふじ幼稚園で子ども8人、職員1人、宮城県亶理郡山元町の町立東保育所で子ども3人が、保育時間中に犠牲となった。宮城県石巻市の日和幼稚園では、送迎バスが、小学校前で7人を降ろした後、津波にのまれ園児5人が亡くなり、同乗していた女性職員1名が行方不明である。宮城県亶理郡山元町のふじ幼稚園では、子どもを乗せ園庭に止まっていた送迎バス2台が津波に襲われ、43人が助け出され、園児8人、職員1名が亡くなった。同じ宮城県亶理郡山元町の東保育所でも園児が亡くなっている。町役場から待機の指示を受け、迎えに来た保護者に引き渡した園児以外は園庭で待機していたが、保育士の「津波だ!」という叫び声で、所長が車で逃げる指示をし、車10台に分乗して逃げている。1台目は、職員1人と園児3人が乗り出発する。2台目は職員1人、3台目は所長を含む職員3人と園児1人までは難を逃れたが、4台目以降は津波に襲われ、園児3人が犠牲となっている(藤崎, 2012)。

東日本大震災により宮城、岩手、福島 of 3県で被災した保育所が315に上り、このうち全壊や津波による流失等甚大な被害にあった保育所が28以上あるということが分かっている(藤崎, 2012)。宮城県私立幼稚園被災状況(2011年8月19日現在)では、学校管理下死亡園児数13名、学校管理下外死亡園児数46名(藤崎, 2012)であり、保育施設での被害も甚大だったことがわかる。

近年、日本では災害による多くの犠牲者が絶えない。また、静岡県から宮崎県にかけて震度7となる可能性があり、科学的に想定される最大クラスの南海トラフ地震が起こる可能性があると言われ、関東

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

地方から九州地方にかけて太平洋沿岸に 10m を超える大津波の襲来が想定されている²⁾。保育施設には歩くことができない乳児もあり、どのような対策を考えるかが、保育施設に求められる。東日本大震災に学び、保育施設での犠牲者を出さないようにする取り組みも、多くの災害に襲われる日本に求められる。

野津（2018:128-132）は、東日本大震災を踏まえて、震災時の保育施設に求められるものについて、①保育施設の耐震補強を行い、保育施設の安全性を確保する、②家具の転倒防止対策を行う、棚からの落下・飛び出し防止対策を行う、③実態に即した避難体制を確立する、④情報手段を確保する、⑤連絡手段を確保する、⑥保護者との連携強化の 6 点が重要であると述べている。③の実態に即した避難体制の確立については、災害時には行政機能がマヒすると考え、マニュアルには、「緊急時は各保育所の判断で避難する」という文言を入れ、速やかに現場で判断し、避難できるようにしておくべきであると述べている。⑥の保護者との連携強化については、保護者に子どもを引き渡す原則は、警報発令された際、保護者への引き渡しを辞め、子どもたちは園が責任を持って避難させ、引き渡しは警報が解除にならない限り行わないことが重要であると指摘している。また、日頃から保護者との連携を強化するために、①「参観日、保護者懇談会等で防災に関する研修を行う」、②「避難訓練を保護者と一緒に行い、避難経路等を保護者とともに確認する」、③「避難場所、引き渡し方法を保護者に周知する」、④「保護者と共に通園路の危険な場所を保護者と一緒を確認する」、⑤「防災マニュアル内容を保護者に周知する」等を心掛けることが重要だと述べている。

日頃の避難訓練が重要なのは言うまでもない。岩手県九戸郡野田村の野田村保育所の体験談として、「冷静な判断、周到な避難計画と日々の訓練、そして子どもを絶対を守るという保育士たちの覚悟が、園児 80 名の命を守りました。」（佐川, 2011:1）と語られている。宮城県女川町第二保育所の体験談としても、「子どもたちは毎月の避難訓練で避難の仕方が身についていたため、泣く子もなく整列していました。」（池田, 2011:13-14）と日頃の避難訓練の重要性を指摘している。

田澤・佐竹（2015:20-21）は、閑上保育所の所長であった佐竹が東日本大震災以前に実施された津波訓練に参加し、災害時避難マニュアルの不備に気付いたと指摘している。津波災害時に指定されていた避難場所は、保育所の子ども・保育者が避難するには狭過ぎるスペースであった為、避難場所を閑上小学に変更し、そのことが後で功を奏したことが記載されている。

ピニェイロ・北後（2017:376）は東日本大震災時の保育所の避難状況を聞き取るにより、避難訓練を実際に行い、年齢別歩行速度や避難車を使った場合の搬送速度を把握し、避難経路や避難方法を見直す必要性を指摘している。

原田（2012:16-18）は東日本大震災の保育所・幼稚園での避難事例を検討し、「1）危機を察知したら一刻も早く避難する」「2）地震と津波の構えを生かして避難する」「3）保育士と園児との信頼関係がある」「4）自分より園児、家族より園児をつらぬく」の 4 点が犠牲者を出さないために重要だと述べている。千葉（2019:51-54）も、東日本大震災の保育所・幼稚園での避難事例を検討し、「（1）保育者同士の連携」「（2）保育者と子どもとの信頼関係」「（3）保育者と保護者・地域との関係性」の 3 点を、犠牲者を出さないために重要な点として挙げている。子どもの命を守るためには、日頃の避難訓練、保育施設の耐震補強、家具の転倒防止対策、棚からの落下・飛び出し防止対策等も重要であるが、本稿

では、東日本大震災で保育所・幼稚園で、どのように避難が行われたかを検討し、子どもの命を守るために、地震発生直後だけでなく、日常の保育活動も何を心掛ければよいのか、保育者に何が求められるのかについても検討する。

震災の記憶は年々薄れていくので、東日本大震災の被害を検討し、その記録を残し、継承に繋げ、日頃の保育に取り入れていくことも重要だと考える。

2. 方 法

文献から東日本大震災における保育所・幼稚園の避難事例を収集し、子どもの命を守るために、地震発生直後だけでなく、日常の保育活動ではどのような点が重要かと考え、重要だと思われる事例を取り上げ検討する。CiNii Articles で、「東日本大震災、保育」で検索したところ、79 件あり、その中で、保育施設での東日本大震災の避難事例を扱った論文が 5 編であった。その 5 編の論文は以下の通りである。

表 1 東日本大震災での保育施設避難事例を扱った論文

著者名	発行年	題名、内容	雑誌名、ページ数
千葉直紀	2019 年	「保育におけるいのちをつなぐ防災とは～東日本大震災から見てきた日常の防災と記憶の継承～」 東日本大震災の保育所・幼稚園での避難事例（荒浜保育所、大槌保育園、今泉保育所、鹿妻保育所、渡波保育所、なかよし保育園、一景島保育所）を検討し、「(1) 保育者同士の連携」「(2) 保育者と子どもとの信頼関係」「(3) 保育者と保護者・地域との関係性」の 3 点を、犠牲者を出さないために重要な点として挙げている。	『上田女子短期大学紀要』第 42 号、49-63
原田眞澄	2012 年	「東日本大震災における保育士の対応に関する文献検討」 原田（2012:16-18）は東日本大震災の保育所・幼稚園での避難事例（高田保育所、長部保育所、明和保育園、なかよし保育園、日の出保育園、福室希望園、一景島保育所）を検討し、「(1) 危機を察知したら一刻も早く避難する」「(2) 地震と津波の構えを生かして避難する」「(3) 保育士と園児との信頼関係がある」「(4) 自分より園児、家族より園児をつらぬく」の 4 点が犠牲者を出さないために重要だと述べている。	『中国学園紀要』第 11 号、13-18
野津牧、 上原隆司、 上野善子、 小島千恵子、 小林舞	2017 年	「東日本大震災から学ぶ子どもの避難と訓練のあり方―日米の防災事例と数学モデルからの検討―」 日米の防災事例を検討するとともに、東日本大震災で犠牲者を出した保育施設（東保育所、ふじ幼稚園、日和幼稚園）、犠牲者を出さなかった保育施設（門脇保育所、第二保育所）の事例を報告している。	『名古屋短期大学研究紀要』第 55 号、89-110
ピニェイロ アベウ タイチ コンノ、 北後明彦	2017 年	「釜石市における東日本大震災発生時の保育施設の市街地津波避難に関する事例調査」 2 保育所（k 保育園（大槌町）、U 保育園（鶴住居））の聞き取り調査を行い、避難経路、避難状況を報告している。	『日本建築学会大会学術講演梗概集』375-376
田澤薫、 佐竹悦子	2015 年	「保育所における保育士の意味決定：宮城県名取市閑上保育所の東日本大震災避難事例に学ぶ」 東日本大震災の避難事例（閑上保育所）に基づき、災害時避難マニュアルの不備や日常的に専門的知識・技術を高めることの重要性を述べている。	『聖学院大学論叢』第 27 巻、第 2 号、15-28

前記の論文に記載されている事例と東日本大震災時の保育施設の避難事例が記載されている雑誌、本（『げ・ん・き』第126号、『季刊保育問題研究』256号、『保育の友』59,14、『忘れない！明日へ共に一東日本大震災・原発事故と保育』）から、災害に備えて日常の保育でどのようなことが求められるのか、保育者に求められるものは何かを検討するために、事例を抽出し検討する。

3. 結 果

(1) 保育者と子どもとの信頼関係、保育者の子どもの把握

表2 なかよし保育園事例

事例1	なかよし保育園（宮城県石巻市）
<p>最終的には床上30cmまで水が上がりました。そして、他での浸水被害と違ったところは、そのまま水がずっと引かなかったことです。身動きがとれない状態のまま、子どもが5人（未満児3人、幼児2人）と職員14人が2階の子育て支援室で二晩過ごしました。</p> <p>あの時点では保護者の安否も把握できない状態でしたので、とにかく、落ち着いて普段の保育を子どもたちにするようにして過ごしました。おかげで夜も怖がらずに保育者を信頼して過ごしてくれました。本当によく頑張ってくれました。</p>	
<p>新開英二（2011）『げ・ん・き』第126号 エイデル研究所 48</p>	

表3 今泉保育所事例

事例2	今泉保育所（陸前高田市）
<p>電気もない状態でしたが、なんとか毛布を子どもたちにかけて、くっつきあって寒さをしのいで、子どもも保育者も不安でした。夜中に「おかあさん」と泣いた子どもは1人か2人いましたが、ほとんどの子どもは、担任とともに頑張ってくれて、混乱はありませんでした。未満児が多くいましたが、子どもにとっては「担任が命」というところがありますから、本能的にもしっかりと頼ってくれたのだと思います。（中略）それから、子どもと保育者の間に信頼関係がなければ、保護者と離れての生活が長く続く中では耐えられなかったと思います。そうした普段の保育の延長が、今回生きたんだと感じる部分がありました。</p>	
<p>新開英二（2011）『げ・ん・き』第126号 エイデル研究所 15</p>	

表4 閑上保育所事例

事例3	閑上保育所（宮城県名取市）
<p>3歳未満児を対象とした小規模クラスの児童は、大勢のなかや高齢児のなかでは不安が大きくなるので、クラスごとの移動を心掛け、小さい子どもだけの集団が守られるように配慮した。高齢児は大人数の集団の方が、避難先についてからの指示もしやすいと考えた。（中略）閑上保育所の全員は、津波到来の30分前には名取市閑上小学校に到着した。移動時間は10分足らずだった。</p>	
<p>田澤薫、佐竹悦子（2015）「保育所における保育士意思決定：宮城県名取市閑上保育所の東日本大震災避難事例に学ぶ」『聖学院大学論叢』第27巻 第2号 17</p>	

(2) 職員間の連携

表5 荒波保育所事例

事例4	荒波保育所（宮城県巨野郡）
<p>地震が来たとき、未満児の寝ているところに、保育士が3人。0歳児が6人、1,2歳児が9人。所長が未満児の部屋に走って、主任が以上児の部屋へ行って、「みんないますか」と言ったら、大きな声で「います、います」と保育士が言って、無事を確認しました。</p> <p>緊急時には、避難の確認のベルを鳴らすことになっていますが、ベルを鳴らすところではないし、大きな揺れを共有しているのでベルを鳴らす意味もありません。非常ベルを鳴らしたら、子どもたちはもっと動揺したのではないのでしょうか。マニュアル通りにはならないことがわかりました。</p> <p>0歳児が6人、保育士2人。1,2歳児、一緒に2歳児のクラスに寝ていて、9人+5人、職員が3人。対面式の</p>	

乳母車（イエロータクシー）二台にそれぞれ4人乗り、おんぶひもして未満児全員、移動を完了させました。（中略）

以上児については、5歳児の部屋に3,4歳児が寝ている4歳児の部屋に子どもがいて（起きかけのこども）2,3名の子ども、フリーの保育士が1人いました。5歳児は3歳の部屋で休息する子、静かに遊ぶ子と各自が自由にすごしていました。ホールにも5歳児2名と用務員の人がいました。この用務員の佐藤さんが掃除をしながら5歳児の子どもが起きてくるので手伝いをしていました。

5歳児の部屋では、子どもたちを部屋の真ん中に集めてブルーシートを被せました。子どもたちは枕元に靴をおいて寝る、パジャマは素肌の上に着る、着替え袋は枕にして寝ていました。夏は臭くて大丈夫なの、という声もありましたが、トイレに行っても靴を枕元において、習慣づいていました。

5歳児は、部屋の真ん中に集めて、ブルーシートのなかに上靴とパジャマを投げ入れて、そこで着替えさせて、防寒着は廊下に吊るしてあるので、抱えて投げ入れました。子どもがバラバラになっているので、連携をとって、点呼をして、第一避難所の園庭に10分で避難し、第二避難所（児童館門）にそれから5分で避難し、荒浜中学校には、地震発生後25分で到着しました。しっかり連携がとれていたと思います。

全国保育問題研究協議会編集委員（2012）『季刊保育問題研究』256号 新読書社 14-16

表6 大槌保育園事例

事例5	大槌保育園（岩手県上閉伊郡）
<p>震災時は、0歳児11名・1歳児16名・2歳児17名・3歳児26名・4歳児16名・5歳児27名、計113名の園児をお預かりしていた。（中略）子どもたちは午睡から目覚めたばかりだった。（中略）揺れている最中に各部屋を回ってみると、すでに子どもたちは先生に防災頭巾を手渡され、三・四・五歳児は頭にかぶっていた。園庭を見ると大きく地割れしていて「これはただごとじゃない！」と直感した。（中略）各クラスを回ってみると先生方がすでに子どもたちにジャンパーを着せてくれていたのですぐに避難することができる！と思った。</p>	
<p>避難訓練では一度、園庭に整列し人数を確認してからまたさらに避難場所へ、という訓練をしていたが、そんな時間はないと判断し、準備できたクラスからすぐに避難するように指示した。町の指定の避難場所には風雨をしのぐ建物がなく、独自に地域の方々から聞いて津波避難場所と決めていた高台にあるコンビニエンスストアに駆け上がった。（中略）北海道南西沖地震、いわゆる奥尻地震ではマグニチュード7・8、震度6、津波の第一波は地震発生後5分、第二波はそれから10分後と言われていたので、私たちもコンビニまで5分以内に走る訓練をしていた。（中略）職員や子どもたちにはあらかじめ知らせずに行う「シークレット」の避難訓練も行ってきており、そのうちの1回はお昼寝中に行った。0歳児が11名の赤ちゃん組は保育士が4人。国の最低基準配置は園児3人に保育士1人となっているが、到底1人で3人の子どもを避難させるのは困難だ。そこで保育士4人のほかに給食担当の栄養士や調理師、支援センター担当の職員にも避難時の担当者を決め、持ち場の安全を確認したあと、避難時の応援を頼み訓練もしていた。避難訓練の時にいつも「足が痛い」「靴が脱げた」などと弱音をばく子どもたちも、その時は必死に真剣に走り、私が最後のクラスを見送った時には先頭のクラスはすでにコンビニがある国道へ上がっているのが見えた。</p>	
<p>『現代と保育』編集部（2012）『忘れない！明日へ共に－東日本大震災・原発事故と保育』ひとなる書房 7-9</p>	

表7 今泉保育所事例

事例6	今泉保育所（陸前高田市）
<p>その日は56人を預かっていました。地震の直後にお迎えがあったので、この時点で子どもが19人、職員が私を含めて17人でした。子ども19人のうち未満児が11人。0歳児クラスの子どもが3人、1歳児クラスが3人、2歳児クラスが5人でした。</p>	
<p>未満児の大半は職員がおんぶをしてよじ登りました。幼児や2歳児の何人かは職員と手をつなぎ、後ろから押し上げられて登りました。職員だけでなく地域の方が引っ張ってくれた子どももいました。あそこは、大人でも簡単に登れる坂ではありません。そこを一気に登って行きました。火事場の…ということだと思います。（中略）そして、職員のチームワークというの、普段の保育の中でしっかりと培っていたからだだと思います。避難訓練にしても、ただ避難するだけではなくて、子どもたちには、「まず静かにして、話を聞くことがすごく大事なことです」と訓練でも毎回話していました。そうした積み重ねが大きかったと思います。</p>	
<p>新開英二（2011）『げ・ん・き』第126号 エイデル研究所 15</p>	

表8 第二保育所事例

事例7	第二保育所
<p>3歳以上の園児は、保育士の指示に従ってついてきて、未満児は所長や給食の先生の力を借りておんぶをしたり、両手をつないだりして第二小学校の校庭まで逃げた。</p>	

野津牧、上原隆司、上野善子、小島千恵子、小林舞（2017）「東日本大震災から学ぶ子どもの避難と訓練のあり方―一日米の防災事例と数学モデルからの検討―」『名古屋短期大学研究紀要』第 55 号 99

（3）保育者と保護者・地域との関係性

表 9 荒波保育所事例

事例 8	荒波保育所（宮城県亶理郡）
<p>地域の人の顔を覚えているということが大事でした。マニュアルだと保護者への引き渡し、第一避難所、第二避難所と決まっていますが、マニュアル通りではなく、引き渡して逃げた方には、ここに留まるかどうかは保護者の選択として、子どもを保護者に引き渡しました。その時誰に渡したかは、常に確認しました。</p> <p>鈴木所長が地元の荒浜地区に住んでいるので、地域の人の顔が見える状況が常にあって、地域とのつながりができていました。これからの課題として、地域の顔が見える保育園ということが大事だと思います。避難所では、おばあちゃんたちには助けてもらえたとし、励まされた面がありました。職員たちは、保護者と関係づくりを意識的にやってきました。苦情があれば、その都度話しあっていけたし、送るときには「パーマかけてめんこいこと」とか「お父さん、機嫌いいこと」とか話しかけてきました。お父さん、お母さんを観察しておくことは大切だし、反対に自分たちも見られています。</p>	
<p>全国保育問題研究協議会編集委員（2012）『季刊保育問題研究』256 号 新読書社 21</p>	

表 10 一景島保育所事例

事例 9	一景島保育所（宮城県気仙沼市）
<p>揺れがおさまるのを待って外へ飛び出し、0～2 歳児を避難車に乗せ、3 歳児以上は歩いて、約 100m 離れた気仙沼中央公民館へ避難しました。保育所と同じ敷地内にある知的障害児施設のスタッフや以前から避難時に協力をお願いしていた工場の若い職員もすぐにかけてくれ、一緒に避難しました。</p> <p>避難所にはすぐに近所の方や保護者が集まってきました。保護者が子どもを車に乗せて帰ろうとするのを、保育士たちは必死に止めました。避難マニュアルに、津波警報が出ている時に保護者が迎えに来ては帰さないことが、以前から明記されていたからです。結果として、この判断が、多くの子どもと保護者の命を救うことになりました。</p>	
<p>全国社会福祉協議会（2011）『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 17-18</p>	

表 11 荒波保育所事例

事例 10	荒波保育所（宮城県亶理郡）
<p>今回の未曾有の震災を体験して、もちろんいろいろな困難がありましたが、人とのつながり、地域とのつながりを強く感じる事ができました。荒浜中学校に避難する際にも、地域の方がたに声をかけてもらい、中学校の先生には避難する車で渋滞するなか、身を挺して子どもたちの横断を助けていただきました。</p>	
<p>全国社会福祉協議会（2011）『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 12-13</p>	

表 12 野田村保育所事例

事例 11	野田村保育所（岩手県九戸郡）
<p>地震発生と同時に停電になり、外からの情報は途絶えました。津波が来るか来ないかもわかりませんでしたが、避難することに迷いはありませんでした。日ごろの訓練どおり、職員たちは救急箱と名簿、タオルとおんぶひもを持てるだけ持ち、避難を開始。上着は着せましたが、靴下を履いていない子もいました。そんな子どもの足を保育士はやさしくさすり、自分の靴下を脱いで履かせたといいます。緊急時の対応（避難ルート、避難場所）は保護者に説明してあったので、避難の途中や一時避難所で落ち合った保護者も多く、引き渡しも進みました。中学校へ避難したときには 40 人ほどになり、日が落ちる頃には全員のお迎えがありました。</p>	
<p>全国社会福祉協議会（2011）『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 3</p>	

(4) マニュアル・指示とリーダーシップ

表 13 東保育所事例

事例 12	東保育所（宮城県亶理郡）
<p>「3月11日午後2時46分、東保育所では大きな揺れに見舞われた後、保育士らが園児62人を園庭に避難させた。所長は指示を仰ぐと午後3時20分ごろ、非番で駆け付けた保育士を町役場に派遣した。『総務課長から現状待機と指示された』。戻ってきた保育士はそう報告。迎えに来た保護者に引き渡した園児を除き、残った1～6歳の園児13人と職員14人が指示通り、園庭で待機を続けた。事態が急転したのは午後4時ごろ。保育士の1人が南東約80メートル先に津波を確認した。『津波だ!』。保育士の叫び声に所長は『車で逃げて』と指示。園児たちは職員の誘導で向かいの駐車場に移動し、保育士と居合わせた保護者の車計10台に分乗した。犠牲になった2歳男児、6歳男児、6歳女児の園児3人が乗ったのは保護者のワゴン車で、ほかに1歳女児と6歳男児の計子ども5人と主任保育士1人が同乗していた。（中略）」（『河北新報』2011年10月14日付）</p> <p>ここでも、職員が子どもたちとともに、津波が間近に迫るまで園庭で待機していたことで、犠牲が出てしまいました。先のふじ幼稚園と同様、東保育所も海岸からの距離は約1.5キロであるにもかかわらず、月1回の避難訓練は行っていたものの、津波を想定した避難行動計画はつくられていなかったことがわかりました。（中略）</p> <p>「職員1人と園児3人の1台目、職員1人の2台目、所長を含む職員3人と園児1人の3台目までは難を逃れたが、4台目以降は津波に襲われた。遺族側は最多の園児5人を乗せたワゴン車が6台目だった状況に疑問を抱く。」（『河北新報』2011年10月14日付）</p>	
『現代と保育』編集部（2012）『忘れない！明日へ共に－東日本大震災・原発事故と保育』ひとなる書房 111-113	

表 14 門脇保育所事例

事例 13	門脇保育所（宮城県石巻市）
<p>保護者の多くは門脇保育所を目指したが、車や自転車で保育所に向かう途中、母親ら5人が犠牲になったほか、子どもを受け取って避難した後、第1波が引いて自宅に戻るなどした親子3組が津波にのまれた。保育所に残った子ども約20人は約35分で避難を終え、全員が無事であった。千葉幸子所長（当時）の話では、大きな揺れが3回来て、揺れが長い時間続いた。「大津波警報」が聞こえたが、「本当に来るかな」と思った。本来は指定避難場所の門脇小学校が避難場所だが、危険だと思い日和山にある石巻保育所に逃げることに決めた。</p>	
野津牧、上原隆司、上野善子、小島千恵子、小林舞（2017）「東日本大震災から学ぶ子どもの避難と訓練のあり方一日米の防災事例と数学モデルからの検討」『名古屋短期大学研究紀要』第55号 99	

4. 考 察

(1) 保育者と子どもとの信頼関係、保育者の子どもの把握

事例1では、普段の保育を心掛け、子どもたちを安心させた。事例2でも、普段の保育の延長が今回生きたと述べており、子どもと保育者の間に信頼関係がなければ、保護者と離れての生活が長く続く中では耐えられなかったと述べている。事例3では、どのように避難すると、子どもの不安が大きくなるか、日頃の保育から判断している。また、子どもたちも保育者との信頼関係が構築されているので、子どもが落ち着いて避難ができ速やかな避難に繋がったと考えられる。

災害における緊急時には、普段の保育が問い直されることとなり、普段の保育で保育士と子どもの信頼関係を築いておくことが重要である。

(2) 職員間の連携

事例4の荒波保育所では保育者だけでなく、用務員が仕事を超えて子どもを助けてくれている。事例5では、栄養士や調理師、支援センター担当の職員が日頃から避難訓練に加わっている。事例6でも、職員のチームワークを普段の保育の中でしっかりと培っていたことが速やかな避難につながったと述べている。事例7でも、未満児を所長や給食の先生がおんぶして避難している。普段の保育で、職員のチー

ムワークを築いておくことも重要なのである。保育園には歩くことができない乳児もあり、多くの大人の助けをかりないと避難できない。保育者だけでなく、保育施設にいる全ての大人たちの連携で、子どもたちの命を守る必要がある。

(3) 保育者と保護者・地域の人との関係性

事例8で、保育者と保護者との関係づくりが重要だと述べているし、事例9では保護者が子どもを車に乗せて帰ろうとするのを保育者が必死に止め、そのことが子どもと保護者の命を守ることとなった。保育者と保護者の関係づくりができていたから、保育者は保護者を引き留めることができたのではないか。保育者と保護者のつながりができていなければ、保護者は子どもを連れて帰っていただろう。

事例6では、地域の方が子どもを引っ張り、坂を登らせてくれている。事例8では、地域とのつながりができていたため、地域の人たちに助けられ、励まされたと述べている。事例9では、同じ敷地内にある知的障害児施設のスタッフや以前から避難時に協力をお願いしていた工場の若い職員もすぐにかけてくれたと述べている。事例10では、避難する際も地域の人に声をかけてもらい、また中学校の先生に助けてもらっている。事例11では、日頃から保護者に緊急時の対応（避難ルート、避難場所）を説明してあったので、避難の途中や一時避難所で保護者と会うことができていた。これらの事例からも、普段から保護者や地域とのつながりを強化しておくことが重要だということがわかる。

磯部（2011:24）は、保育所は自分で逃げることができない幼い子どもたちが生活する場所であることを指摘し、東日本大震災の際、保育士だけでなく、近隣の商店の人、工場のお兄さん、消防団の人たち等、多くの地域住民が保育施設の子もたちを救ったことを指摘し、地域の子もは地域で守るという意識が重要であることを述べている。

野津・上原・上野・小島・小林（2017:94）は、震災時に人の命を救うのはレスキュー隊だけでなく、人の命を救う最も重要な者は近隣住民だと述べている。

子どもの命を救うための重要なポイントとなるものの一つは、保育者と近隣住民即ち保護者、地域の人との良好な関係性であるということが、事例から窺える。

(4) マニュアル・指示とリーダーシップ

事例9ではマニュアルに従い、子どもたちを帰さず、犠牲者を出していない。しかし、マニュアル通り、指示に従い犠牲者が出た保育施設もある。地震発生後に、様々なことを言うのは簡単であるが、犠牲者を出した事例についても検討することも意義深い。事例12の東保育所は、午後2時46分に地震が発生してから30分以上たった午後3時20分ごろに、非番の保育士を町役場に向かわせ指示を仰いでいる。その指示は現状待機だった。その指示を守り、津波にのみこまれる。

それに対して、事例5の大槌保育園は、「避難訓練では一度、園庭に整列し人数を確認してからまたさらに避難場所へ、という訓練をしていたが、そんな時間はないと判断し、準備できたクラスからすぐに避難するように指示」している。また、「町の指定の避難場所には風雨をしのぐ建物がなく、独自に地域の方々から聞いて津波避難場所と決めていた高台にあるコンビニエンスストアに駆け上がった」とあり、町の指定の避難場所が避難場所として本当に自分の保育施設に合っているのかを問い直し、地域

の方々から情報収集し、その保育施設で検討し、新たな避難場所を決めている。また、施設長の判断で行っていたシークレットでの避難訓練の重要性についても述べている。事例12は指示を待っているのに比べ、事例5は町が指定するマニュアルや指示が本当に自分たちの園にふさわしいものか普段から問い直し、緊急時もマニュアル通りではなく、そんな時間はないと判断し行動している。

事例8でもマニュアル通りではない対応をし、犠牲者を出していない。事例4でも、非常時に避難の確認のベルを鳴らすことになっているが、ベルを鳴らさず、非常ベルを鳴らしたら、子どもたちはもっと動揺したのではないかと振り返っていて、マニュアル通りにはならないと述べている。

野津(2018:130)は、災害時には行政が機能しなくなると考えるべきであり、マニュアルには、「緊急時は各保育所の判断で避難する」という文章を付け加えるべきであるの述べ、速やかに現場に合った判断を下せるようにしておくべきであると述べている。

磯部(2011:24)は、マニュアル通りに動かず、助かった事例が少なからずあったことを指摘し、避難マニュアルが有効に機能しなかった点、もし避難マニュアルに従っていたら、どうなっていたのかという点を重く受け止めるべきであると指摘している。

事例12は、指示を聞きに行ったのも、30分以上たってからであり、また子ども、保護者よりも所長が先に避難している。これらは、リーダーとしての資質が問われる事例である。また事例12の施設は、海岸から約1.5キロの距離にある保育施設にもかかわらず、津波を想定していなかった。これも、マニュアルを超えて、リーダーが判断しなかった例ではないだろうか。

事例13の所長は大津波警報は聞こえたが、「本当に来るかな」と考え、子どもを保護者に渡し、その親子3組は津波にのまれている。

リーダーの資質について、山名・矢野(2017:91-92)は、「津波浸水予想地域外にあったY小学校の校長は、短時間の思案の末にこの予見[津波が想定を超える予見]を得て、子どもたちの高台避難を決断した。法的には要求されないが、教育的には要求されるこの予見を、強調して<予見>と記そう。この<予見>は、じつは、グリーンリーフ(Greenleaf,R.)が、サーバント・リーダーシップ(servant leadership 奉仕するリーダーシップ)として最も重視した能力の一つである。リーダーシップには、学術的なレベルでは測れない複数の知的能力が求められる。その能力は学術的な知性と相反するわけではないが、別物である。……リーダーには、知ることができないものを感じ取り、予見できないものを予見する能力が必要なのである。〔〕内は筆者加筆」と述べている。

リーダーには、予見できないものを予見する、最悪の事態を予見する力が必要であり、マニュアル・指示を超えて判断する力が求められる。

5. まとめ

(1) 保育士と子どもとの信頼関係、(2) 職員間の連携、(3) 保育者と保護者・地域との関わり、(4) マニュアル・指示とリーダーシップに絞り、検討してきた。災害時には、保育士と子どもの信頼関係を普段の保育で築いておくことが重要となる。また、保育者だけでなく、全職員が連携できるように普段から関係を構築しておくことも重要である。普段から、保育者は保護者・地域との関係を築いて

おくことも重要である。保育施設を預かる施設長は、マニュアル・指示に従うだけではなく、普段も緊急時もマニュアル・指示を超えて、判断・行動することが必要だと考えられる。マニュアル通り、役場の指示通りに行って、犠牲者が出なかった保育施設も多くあるだろう。しかし、マニュアル通り、役場の指示通りに行き犠牲者を出した保育施設があるのも事実である。この事実に向き合い、対策を考えることが、今後の災害で犠牲者を出さないために重要なことである。

歩くことのできない乳児・幼児を預かる保育所・幼稚園は、大人が的確に判断し、誘導しなければ、乳児・幼児の命を守ることはできない。その判断や行動を検討することが今後、保育所・幼稚園での犠牲者を出さないことに繋がる。

本稿では、避難事例を収集し、避難事例を検討し、犠牲者を減らすために、保育者に求められるもの、普通の保育に求められるものについて検討した。しかし、事例数が少なく、他にも重要なことがあると考えられる。より多くの事例で検討することが今後の課題である。

<注>

- 1) 2020年3月7日 日本経済新聞「死者数1万5899人 震災9年、警察庁まとめ」

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO56536620X00C20A3CZ8000/>

(2020年12月27日)

- 2) 国土交通省気象庁「南海トラフ地震で想定される震度や津波の高さ」

<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/nteq/assumption.html>

(2020年12月27日)

<引用文献>

千葉直紀 (2019) 「保育におけるいのちをつなぐ防災とは～東日本大震災から見てきた日常の防災と記憶の継承～」『上田女子短期大学紀要』第42号 49-63

藤崎隆 (2012) 「命の視点から保育と保育制度を問う」『現代と保育』編集部『忘れない！明日へ共に～東日本大震災・原発事故と保育』ひとなる書房 104, 105-106, 109, 111-113, 115

原田真澄 (2012) 「東日本大震災における保育士の対応に関する文献検討」『中国学園紀要』第11号 13-18

林小春 (2011) 「チームワークで子どもたちを守る」佐川英雄『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 17-18

池田徳子、梁取礼子 (2011) 「津波、そして避難所として」佐川英雄『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 13-14

磯部裕子 (2011) 「東日本大震災のあとに生きる～問われる保育の今」佐川英雄『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 24

野津牧 (2018) 『東北の保育者たちに学び、備える』ひとなる書房 128～132

野津牧、上原隆司、上野善子、小島千恵子、小林舞 (2017) 「東日本大震災から学ぶ子どもの避難と訓練のあり方～日米の防災事例と数学モデルからの検討～」『名古屋短期大学研究紀要』第55号 89～110

- ピニエイロ アベウ タイチ コンノ、北後明彦（2017）「釜石市における東日本大震災発生時の保育施設の市街地津波避難に関する事例調査」『日本建築学会大会学術講演梗概集』375-376
- 佐川英雄（2011）『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 1,3
- 新開英二（2011）『げ・ん・き』第126号 エイデル研究所 15,48
- 鈴木由美子（2011）「子どもたちを助けてくれてありがとう」佐川英雄『保育の友』59,14 凸版印刷株式会社 12-13
- 田澤薫、佐竹悦子（2015）「保育所における保育士意思決定：宮城県名取市閑上保育所の東日本大震災避難事例に学ぶ」『聖学院大学論叢』第27巻 第2号 15-28
- 八木澤弓美子（2012）「命の重さを抱きしめて」『現代と保育』編集部『忘れない！明日へ共に－東日本大震災・原発事故と保育』ひとなる書房 7-9
- 山名淳・矢野智司（2017）『災害と厄災の記憶を伝える 教育学は何ができるのか』勁草書房 91-92
- 全国保育問題研究協議会編集委員（2012）『季刊保育問題研究』256号 新読書社 21,14-16